

総合教育研究センター

学生向け情報誌

クレードル

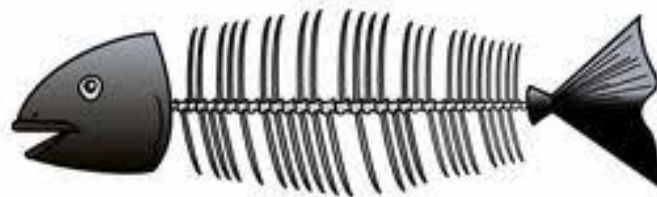
第4号

# CRADLE

Center for Research And Development of Liberal arts Education  
4th issue Autumn, 2013

## 死魚の眼が輝くとき

小田 健(総合教育研究センター 政治学)



生来の酒好きでそのためにいろいろ失敗もしてきた。庄司薫氏の表現を借りれば、思い出すたび「ギャッと言ってひっくり返」りたくなるようなことを何ダース分もしてきた。今日その何ダース分の重みに耐えていられるのは、人間がものごとを忘れることができるからである。

その点、人間の身体に及ぼす酒害はより深刻である。肝臓の $\gamma$ GTP の値を本人が忘れたとしても、彼/彼女の肝臓機能が回復するわけでもない。いくら忘れきったところで、肝臓は腫れあがったままである。かくして、私の日常生活は、土気色の顔に死魚の眼を貼りつけてよろよろと、さして重くもない身体を引きずって歩くはなはだ鈍重なものとなった。

その時分に天理大学の学生からかけられる言葉は、「先生、一段とお痩せになって」とか「先生、なんか一回り小さくなったね」とか「先生、瞳孔が開いています」

### 第4号の内容

PP. 1-2 死魚の眼が輝くとき

PP. 3-11 特集「森に生きる」報告

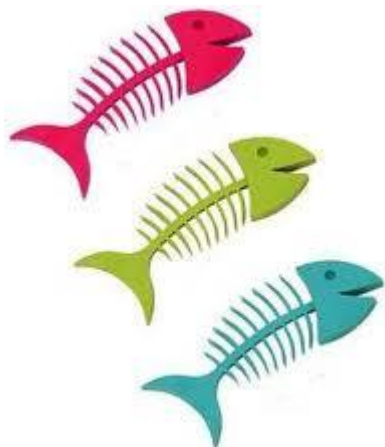
P. 12 こころの健康法2ー日帰り温泉に行きましょう

よ」などというたぐいで、もっとも、そのように辛辣なセリフを聴いても一向に動じない、つまりは、身体のみならず精神もはなはだ鈍重なていたらくで、鈍重な身体に鈍重な精神を貼り付けて南棟と研究棟を往復するわけだが、不思議なことに傍目にはさほど重々しく歩いているようには見えならしく、同僚から道中かけられる言葉は、「小田さん、足が地面に付いていませんよ」・・・つまりは、死線をさまよっているのだ。

ところが、平成 24 年の夏、ふとしたことから酒を断つ気になった。「ふとしたこと」と「断つ気になった」をもう少し正確に翻訳すると、「もうちょっとで死ぬところだったので仰天して酒を放り投げた」という文章になる。詳細な経緯はともかくとして、酒をやめたのは事実なので、私の五臓六腑も徐々に安堵し、これでしばらくは楽ができると算段したに違いないのである。私の顔色もだんだんとよくなり、体重もだんだんともとにもどり、その分南棟と研究室の往復が軽やかなみちゆきとなった・・・そんなある日、平成 25 年の春だが、8号棟の入り口のところで、4年生になったばかりの学生に会った。基礎ゼミをとっていた学生で、いわば旧知の間柄ということになる。とは言え、会うのは久しぶりなのでしばらく立ち止まって昔話を交わした。別れ際のその学生の言葉、「先生、眼が輝いていますよ。3年前と全然違いますね」。

「眼が輝いていますよ」。何と人を力づける暖かい言葉であろう。単にその人物が健康だと肩をたたかただけの言葉ではありえない。身体的にも精神的にも充実して、なお何かを仕上げようとする気力があることをあえて証言しようとする言葉である。もう一つある。この言葉が、年齢や立場の上の人間がより下方の人間に向かって発せられたのなら、言葉のその力は実はさほどでもない。というより、上の人間が下の人間にこういう言葉を伝えても、至極当然、当たり前前の出来事のおもしろくも何ともない。若い学生が、自分の年齢の三倍ほどの教員に向かって自然に発した言葉であるところがミソであり、大いに愉快的な所以である。そこには、「水平的連帯」がさりげなく存在しているのだ。どだい、例えば東大生が東大教授に向かって「先生、眼が輝いていますよ」などと言う場面は想像だにしにくい。そこには「水平的連帯」というものがありたいのである。「水平的連帯」は今ここにしかありえない。愉快哉、愉快哉。かくして、「死魚の眼にも涙」。

学生がそのような言葉を教師に贈る風景は、ただ天理大学だけに見られる風景であるような気がする。それは、天理大学の精神がつくりだす風景だと言っていいかもしれない。年齢 60 を越え、もはや「高齢者」の域に達そうとしている私ではあるが、その期に及んでの願いは、このような暖かく力強い精神が、絶えることなく天理大学の歴史に脈々と生き続けることである。



# 10年目を迎えた 「森に生きる」の報告

伊藤 義之（総合教育研究センター長）

今年も夏休みの8月6日から5日間、普段は静かな奈良県の山間の村に学生たちの声が響き渡った。『建学の精神』を実践する科目、「他者への貢献」を柱にした授業「森に生きる」はこの十年間のべ百人以上の学生や教職員らを奈良県中部の川上村の森林に送ってきた。



## 実習日程

### 事前研修

5月13日(月)	16:30 ~ 17:30	@PC第3教室 「科目の趣旨や概要、受講に関する注意点の説明」
6月27日(木)	16:30 ~ 17:30	@PC第3教室 講義「奈良県の林業と林業経営について」 (講師 奈良県農林部林業振興課職員 埴口氏、今治氏)
7月15日(月)	16:30 ~ 17:30	@G Square (総合教育研究センター第一共同研究室) 講義「吉野の林業の特徴および実際の実習林の作業について」 (講師 作業指導員 水本茂氏)

### 現地実習

8月6日(火)	10:00	集合・大学出発
	11:30	現地到着
	12:00 ~ 14:00	荷物運び入れ／宿舎準備
	14:00 ~ 16:00	実習林および周辺見学
8月7日(水)	9:00 ~ 12:00	間伐作業
	13:00 ~ 16:00	間伐作業
8月8日(木)	9:00 ~ 12:00	間伐作業
	13:00 ~ 16:00	遊歩道作り作業
8月9日(金)	9:00 ~ 12:00	間伐／遊歩道作り作業
	13:00 ~ 16:00	間伐／遊歩道作り作業
8月10日(土)	9:00 ~ 12:00	宿舎片付け／清掃
	13:00 ~ 14:00	「森と水の源流館」見学
	16:00	大学着／解散

# 参加者一覧

## 1 組

◎班長 ○経験者

### A班

- ◎玉正 啓記 (文学部歴史文化学科考古学・民俗学専攻 4年) (1組リーダー)
- 森 穂乃香 (国際学部地域文化学科アジア・オセアニア研究コース 3年)
- 石塚 知也 (国際学部地域文化学科アジア・オセアニア研究コース 3年)
- 田中 佑宜 (近畿大学農学部バイオサイエンス学科 3年)

### B班

- ◎山口 朋之 (人間学部人間関係学科生涯教育専攻 4年)
- 井上 正喜 (国際学部地域文化学科アジア・オセアニア研究コース 3年)
- 綿谷 駒太郎 (人間学部人間関係学科生涯教育専攻 4年)
- 木村 保 (国際学部地域文化学科ヨーロッパ・アフリカ研究コース 3年)

## 2 組

### C班

- ◎新志 孝文 (文学部歴史文化学科考古学・民俗学専攻 4年) (2組リーダー)
- 岡本 匡由 (人間学部人間関係学科生涯教育専攻OB 一日のみ参加)
- 富士原 萌 (体育学部体育学科武道コース 4年)
- 橋本 大慈 (人間学部人間関係学科臨床心理専攻 4年)
- 小林 峰大 (人間学部人間関係学科社会福祉専攻 2年)

### D班

- ◎糸島 竜也 (人間学部人間関係学科社会福祉専攻 3年)
- 篠原 聡 (文学部歴史文化学科歴史学専攻OB)
- 初田 有香 (人間学部人間関係学科臨床心理専攻 3年)
- 永尾 将来 (人間学部宗教学科 2年)



# 参加者の声

(学生たちの「実習のしおり」を抜粋)

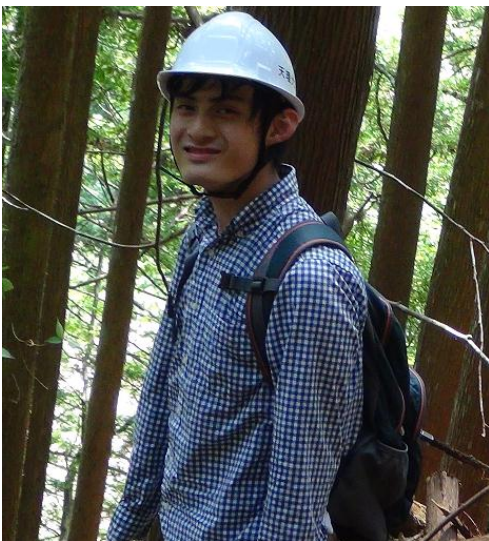
**森 穂乃香** 森に来て、日本に一時帰国して良かったと思った(※ 森さんは中国に留学中)。初日から皆と打ちとけられ嬉しかったし楽しかった。自然と触れ合う心地よさ、皆と協力してやるチーム力、本当に素敵だと思う。もっと、もっともっと、女の子に参加してほしい。森に興味をもってほしい。

**橋本 大慈** 印象に残ったのが、役割分担の際に自ら進んでその役割をかってでる、という光景がよく見られたことです。受動的に作業に取り組むことも



場面によっては

大切だが、やはり能動的に取り組む方がいいな～と感じました。▼水本先生と一緒に屋根のペンキ塗りをしました。水本先生が「森に生きるという事は、単に間伐作業や遊歩道を作ることだけでなく、こうやって家の維持や修理などを行うことも含めて森に生きるというのだよ、ちゃんと理解するのだよ！」と仰っていたことがとても印象的でした。



**石塚 知也**

木を切るという事は簡単に見えて難しく、なめて作業をすると命も落としかねないと思う。高低差は激しく、すごくしんどかったです。ご飯を作るのも火、風呂をわかすのも火、火をつくるのにいるまき割りと、平地では考えられない生活形態で改めて日々の便利な道具に感動しました。そして皆で協力して作るめしがこんなにもおいしいものなのかとも思いました。



**初田 有香** 私たちの班は、木を切っていました。2年目ですが、いまだに木がどのように倒れるのか全く分かりません。奥が深いと思いました。

**永尾 将来** 先輩にさそわれて興味本位でこの実習に参加したんですが、ここまで充実し、貴重な体験をすることができるとは思っていませんでした。普段じゃ絶対に使わない道具やかまどなどとても刺激的だった。先生も先輩たちもとても優しい人たちばかりだったので一番年下でもすごしやすくめちゃくちゃ楽しかったです。



**綿谷 駒太郎** 初めての林業体験。普段使わない筋肉を使って全身が痛い。また、水本先生から教員のお話をじっくりと聞かせていただきました。

▼(草刈りをした)看板の横にある山は人工の山ですが、中に入ってみると木が枯れていて、山が死んでいました。木も細く、押せば倒れるほどでした。手入れをしない山は光が入らなくて、下草も生えてなくて、中に入ると出てこられなくて白骨化している動物もいました。ただ木を植えるだけでは森を作ることはならないのだと再認識しました。



**糸島 竜也** 今年から班長をさせて頂きました。間伐作業では永尾君も初田さんも積極的に参加してくれたのでスムーズにできたと思います。遊歩道作りでは大木もみんなで協力して除去することができよかったです。▼最

終日、起きてご飯を食べて宿舎を清掃しました。私はトイレ掃除をさせて頂きました。班長としての役割を頂き去年とは少し違った実習になったと思います。5日間ありがとうございました。

**井上 正喜** 今年は作業が班ごとだったので、とてもよかった。また、一班に1人はリピーターがいたので、学生が学生を教えることによって、親睦の速さも今までより早いと思いました。しかし何点かは支障をきたす点があり、たとえば起床時刻の設定と前日に大まかなスケジュール通しをしてはいいのではないかと思いました。そうすれば、定時に起床し、皆が何をすれば良いかわかるのではないのでしょうか。



**小林 峰大** いきなり作業が始まりました。まさに森に生きている感じでした。木の伐採の方法も教えてもらい、めっちゃ細い木でも切るのに時間がかかって、とてもいい汗かきました。▼(遊歩道作りをした)4日目はびっくりするくらい集中していました。時間がたつのが早くて、もっとしたい、早く完成したいという思いで作りました。BBQも楽しくほんまに最高の1日でした。

**田中 佑宜** 初日は他大学からの参加なので緊張した。作業1日目。目の前で木が切り倒されるのを目のあたりにし、その衝撃や音のすさまじさにおどろいた。▼最終日、家を掃除し、帰路へ。道中見学した源流館は非常に楽しかった。また来年来たいと思う。▼今回の参加を通して、ただ木を切るだけではなく、木を切ることで起こること、切らない事で起こることも教えてもらい、林業の必要性を実感するとともに、これを生業とすることの難し



さ、厳しさを感じた。

**新志 孝文** 作業初日（2日目）は最初2組に分かれて木の間伐の練習を行った。もやい結びは久しぶりで結び方を忘れてしまっていた。モクモクさん（OBの篠原聡さん）に再び教えてもらい復習した。その後A～Dの4班に分かれて作業を行った。▼3日目は私の班が「伊藤プロジェクト」を手掛けました。遊歩道を造り、階段を造り既存の道と道をつなぎ行き来できるようにするというものです。今日中の完成はできませんでした。▼4日目、伊藤プロジェクトのために朝食で腹ごしらえをしていざ出陣！昼になる前には無事完成しました。 昼からは恒例のスイカ割りをして泳ぎました。



**富士原 萌** 遊歩道作りで杭を作ったり、木を切ったりしました。遊歩道がどのように作られるのか、自分で作ってみて大変さが分かりました。自分たちでどこに道を作るのかを決め、



そのためのアイデアを出して作り出す。1つのものを作り上げたときの達成感、やりきった気持ちで満ちていました。遊歩道を完成させるために大きな木を切り、かけ橋に地面を掘り平らにしました。完成したときの喜びは言葉にできないほどでした。▼この実習に参加できて本当に自分の成長になったと思います。普通の生活とは違った生活。かまどで炊くご飯、まきわり、お風呂わかしなどメンバーみんなで力を合わせる共同生活は一生の宝だと思います。▼次回参加する人にもこの体験で何か見つける、見つかると思うのでぜひ参加してほしいです。



木村 保 料理が得意という事で、率先して料理をしています。献立を考えるのはなかなか難しいです。ですが、「美味しい」という声を聞くとやはり嬉しいのでこれからも頑張りたいです。▼こんな風に教師と生徒が共同生活するのはいいもんですね。純粹に楽しいです。▼「天理大学用木の森」の看板の奥にある森に入ってみました。木を植えただけで、枝打ちや間伐など手入れをされない木はどんどん腐っていき、植えた意味がなくなるということを知りました。資源という形で木を伐採していった責任がありますが、人工的に植えた後にも責任があるのです。▼この実習を通して林業の必要性や、作業を体験することが出来、とても楽しかったです。森に生きるメンバーとも仲良くなれて嬉しいです。この実習の面白さをまだ知らない友達に教えたいと思います。



篠原 聡 今までにないほど、1日目から仲の良い様子。1日目ならではのドタバタも、リーダーの力で小さい様子。▼今年から「班分け」を最初から設定していたのはとても作業しやすく、リーダーとの意思疎通も取りやすく感じられました。またリーダーになった学生も責任感が出ていると思いました。班員も誰に相談すればいいか分かりやすかったと思います。▼反省点としては調理が一部の学生に偏りすぎていたので料理長の負担が大きいのように思います。女性が少なかった為でもあると思われます。



山口 朋之 （2日目になって）一人一人自分の役割を持って行動するようになって一日の生活がまとまってきました。中には自分の役割がわからない人もいましたが、自ら動いて他の人のために働こうとしていました。B班のリーダーなので、しっかりとまとめていこうと思います。▼（実習4日目になり）疲れがたまっていたので作業一つ一つの動きがたいへんでした。ケガをしやすい時期なので、集中して作業をしました。危険と隣合せなので周りにも目をくばりました。森の中には危険がたくさんあるので注意できる人も必要です。私自身もそうでしたが、責任感や危険への自覚が足りなかったと思います。▼森で活動することにより「考える力」が身に付いたと思います。普段使わない道具を使ったのでいい刺激にもなりましたし人に教えられるくらいのスキルが身に付きました。この実習で得た物は今後の生活や学習につなげていこうと思います。



玉正 啓記 5日目、今年も例のごとく流しそうめん。憂鬱。田中と料理長(木村君)と3人



でそうめんをゆでた。40束・・・どう考えても多だろうこれは。案の定食べきれず、山の神へ返すことに。きっとあきてる。山の神もあきてる。その後、源流館、温泉とお決まりのコースへ。温泉は面倒ではいらなかったけど、やっぱりごはんはおいしかった。4日間頑張った自分へのごほうび。そのままバスにのって気付けば大学。来年は参加できるだろうか・・・どちらにせよ。学生としての参加はこれでおしまい。ありがとう、森に生きる。

# 今年の実習を支えた人たち

(指導員、担当教員、ボランティアの参加者)

(写真 上段左から)

みずもと しげる  
水本 茂 (指導員、実習林・宿舎所有者)

いずたに よしあき  
泉谷 吉昭 (指導員、林業専門家)

いとう よしゆき  
伊藤 義之 (担当教員、人間学部総合教育研究センター 教員)

なか あつし  
仲 淳 (担当教員、人間学部総合教育研究センター 教員)

たにぐち なおこ  
谷口 直子 (ボランティア、人間学部人間関係学科生涯教育専攻 教員)

おおた こうき  
太田 耕軌 (ボランティア、国際学部言語教育研究センター 教員)

すぎもと めぐみ  
杉本 めぐみ (ボランティア、人間学部総合教育研究センター 事務助手)

おかもと まさよし  
岡本 匡由 (リピーターOB 人間学部人間関係学科生涯教育専攻卒業)



## こころの健康法2

## 日帰り温泉に行きましょう！

仲 淳（総合教育研究センター 教職課程）

わたしたちの日常には、わずらわしいことや、大変なこともたくさんあります。日々ふつうに生活をしているということだけでも、なかなかいろいろあることで、ときに上手に息抜きをしないと、疲れがたまってきます。イキぬくためには、イキぬきが必要で、そうしないと人はイキイキしてこないのです。

思いきり手脚を伸ばして、「ハーッ」と息を吐く。そしてだら～んとすると、わたしたちのからだは弛緩して、不思議なことに活力がまた戻ってきます。どんなバネやゴムなどのやわらかいものでも、ずっとピーンと張ったままではいつしか弾力が失われて、伸びきったまま元に戻らなくなってしまいうように、わたしたち人間のこころやからだも、いつもいつも張り詰めた緊張感にさらされていては持ちません。たくさんがんばったら、十分に休んでリラックスすることが、わたしたちの健康維持には欠かせないことなのです。

そしてそういうときに、日帰り温泉(もちろん泊りがけでも)は、うってつけではないでしょうか？

いつもとちがう広い湯船につかって、手脚を存分に伸ばして、「あ～」と声を出せば、そのあとは自然に「ごらくごらく～」という言葉が口を突いて出てくることでしょう(笑)。

温泉はマグマのパワーによって湧き出してくるものなので、なみなみととめどなく溢れでてくるあたたかいお湯の中に身を浸せば、ちょっと大げさかもしれませんが、地球のエネルギーに直接からだを包み込まれるわけです。しかも日ごろのさまざまなポーズから解放されて、文字通り裸になって生まれた時のままの姿にかえっているわけですから、癒しとリフレッシュ効果は抜群です。青空の下(星空でもいいです)、露天風呂につかれば、からだごと湯と空気の中にとろけ出て、天地のパワーが全身にリチャージされること請け合いです。さらにお風呂上りにちょっとおいしいご当地のものをつまんだり飲んだりすれば、おなかの中まで満たされて、昨日までの疲れはリセット!「また明日からガンバろ～」という気力がふつふつとわいてくるはず。心理的にいえば、温泉施設に行ってお湯につかるというのは、地球という大きな存在に抱っこされている、という感じなのかもしれませんね。

火山国である日本の温泉の歴史は古く、大分の別府温泉は、5万年くらい前から湧いていたのではないかとのことです。そして古来日本人は温泉をこよなく愛してきました。石器時代の湯浴み施設ではないかと思われる遺跡も見つかっているとかいないとか……。映画『千と千尋の神隠し』の舞台も、「油屋」とよばれるお風呂屋さんでしたよね。

奈良にも隠れ家的なものも含めて温泉はたくさんあります。今度のお休みには、みなさん日帰り温泉に出かけてみてはいかがでしょうか？

## 奈良県勝手にスーパー銭湯ランキング

- 1位 曽爾高原温泉「お亀の湯」
- 2位 生駒市「音の花温泉」
- 3位 大宇陀温泉「あきののゆ」

(枠外) 吉野入之波温泉「山鳩湯」←森に生きるで行く温泉です。

